

生徒（生活）指導（学級づくり）研究部会

- I 部会研究テーマ 統一テーマ 「望ましい生徒指導のあり方について」
学級づくり部会テーマ 「子どもどうしのつながりをどうつくるか」

II 研究テーマ設定の理由

昨今、学級が抱える問題は、いよいよ多岐にわたっている。そんな中、揺れる子どもたちの向こう側に見え隠れするのは、子どもどうしの人間関係の希薄さである。

今、子どもたちに必要なのは「体験」である。特に人間関係の構築に必要なコミュニケーション能力の育成には、五感を使い、周りの人間や事象と実際に触れあう実体験が必要不可欠である。昔は意図しなくても、あちこちにあったその体験を積むための「場」であるが、それが減少してしまった以上、たとえ規模的にはささやかであったとしても、「学級集団」というくくりの中で、その「場」を意図的につくっていくしかない。それが我々教師にとっての責務である。また、実際につまずいてしまった子どもがいたとして、何がそうさせてしまったのかは正に十人十色。だからその原因を探るところから始め、取り除く方策について考える。これも実践していかななくてはならないことであろう。

本部会は、そういった実践を一人一人が持ち寄り、話し合い、深め、そしてそこから得たスキルを共有していくことを目的としている。その実践を総称して『『子どもどうしのつながり』づくり』とし、その進め方についての研究を本部会のテーマに設定した。

III 研究の経過と内容

第1回：4月10日

○組織作り（役員人事、研究テーマ及び研究の進め方について）

部長（部会長）1名、事務局1名、県教研推進委員1名、会計1名、副部長1名、部会員9名 計14名

第2回：5月15日

○学習講座 部長・副部長

本年度のスタートにあたって、学級づくりや研究に向かう姿勢について、豊富な経験をもとにお話をいただいた。学級づくりの原則を踏まえながら学級集団をつくっていくことが大切であり、学級づくりを通して教師力を向上させていくことを目指そうというお話であった。そして実践を支えていくものは、教師自身の「子どもと一緒にたのしもう。」という気持ちであるということをお話いただいた。研究の方向性が示された、大変有意義な講座であった。

第3回：6月17日

○レポート分析① 朝日小の実践「学級をつくっていく上での2つの観点」

学級をつくる上で「集団でつくる」「一対一でつくる」という二つの観点に注目した実践報告。レクを行う中で小さな成功体験を重ねさせるという実践であった。『みんなでやるとたのしい。』ということ子どもたちに植え付けていくことが大切であるとの確認がなされた。

第4回：8月7日

○レポート分析② 相川小の実践「エンカウンターを取り入れ、前向きな学級づくりを目指す」
エンカウンターを活用した子どもどうしの人間関係づくりに焦点をあてた実践報告。毎日繰り返される日常の取り組みとエンカウンターをリンクさせた実践が評価された。また、課題のある子どもを支援するための具体的な手だてについても話し合われた。

○レポート分析③ 北西中の実践「よりよい学級をつくるために ～日常の取り組みを通して～」

日常の取り組みを大切にすることを学級づくりの中心に据えた実践報告。学級通信において個々の生徒にスポットを当てたり、生活ノートを利用して生徒と対話したりする実践が紹介された。また、どのようにして学級で話し合う時間を生み出すかという課題も出された。

第5回：8月20日

○レポート分析④ 玉諸小の実践「自分たちで問題解決できる学級づくり」

自治的な学級を目指して、対話力を養うことと信頼し合える仲間づくりを行うことに焦点をあてた実践報告。学級でトラブルが発生したときは、当事者だけでなく学級全体で話し合い、それぞれの子どもに自分のこととして考えさせることが大切であるとの意見が出された。

○レポート分析⑤ 山城小の実践「周りとの関わり方について」

特別支援学級に在籍する児童に関する実践報告。その子に合った課題設定の仕方や交流学級の子どもたちとの関わり方について考えさせられる提案であった。子どもにとって効果的な継続指導をどのように行っていくのかということについても話し合われた。

第6回：9月4日

○レポート分析⑥ 山城小の実践「当番活動のなかでの主体性を」

学級の当番活動を振り返り、精選や新設、さらに工夫をすることで、子どもに主体性をもたせることをねらった実践報告。決められた当番活動の中で、児童の主体性を育成するような仕組みをもたせるため、折に触れ評価をしていくことが必要であるとの意見が出された。

○レポート分析⑦ 山城小の実践「学年主任として、よりよい学年経営を考える」

学年主任として、どう学年を運営していくかについての実践報告。学年職員が同僚性や協調性を高め、同一歩調で進んでいくことなどの重要性が提案された。学年職員全体で学年の子ど

もたちを指導・支援していける体制づくりがよいという意見が出された。

第7回：10月2日

○レポート分析⑧ 大國小の実践「ADHDの児童への支援と学級集団づくり ～Aとともに成長するクラスをめざして～」

発達障害をもつ子どもを学級の中でどう成長させ、その子どもとの関わりを通じて学級集団をどう変容させるかについての実践報告。その児童の特性を考えた支援や保護者への丁寧な対応が素晴らしいとの意見が出された。また、子どもの権利条約についても話題に上がった。

○レポート分析⑨ 朝日小の実践「互いに認め合う学級を目指して ～『ほめ言葉のシャワー』を通して～」

菊池省三氏の実践である「ほめ言葉のシャワー」を取り入れた実践報告。「ほめ言葉のシャワー」についての質問が多く出され、その内容を学習する機会となった。また、学級の雰囲気をよくするには、ほめることが効果的であり、実践の継続が大切であるという確認がなされた。

第8回：11月4日

○レポート分析⑩ 南西中の実践「行事を通して学年集団づくりを ～職場体験学習を通して～」

職場体験学習を通して個が成長し、それが集団の成長につながっていくという過程が示された実践報告。どのようにして行事の中で生徒を成長させていくのか、教師は生徒への言葉かけをどのタイミングで、どのような内容で行うのかなどについて話し合いがなされた。

○レポート分析⑪ 貢川小の実践「クラスの実態をふまえての学級づくり」

子どもたちが安心して楽しく過ごせる学級を目指した実践の報告。工夫をこらした係活動について討議がなされた。また、興奮状態になった子どもには、自分をクールダウンさせる方法を教えることが効果的だということが確認された。

第9回：1月27日

○レポート分析⑫ 甲運小の実践「授業を通して学級づくりを考える」

特別支援学級に在籍する生徒が、通級する親学級の生徒と関わりながら互いに成長していく姿が紹介された実践報告。特別な支援が必要な生徒への教師の働きかけ方や公立学校の特別支援学級が抱える課題などについて討議が行われた。

IV 研究の反省と課題

今年度も多くの実践が報告された。本部会は14人と人数的には多いとは言えない。しかし、だからこそ全員が自らの実践を発表でき、また毎回全員がそれについて意見を述べる事ができた。そこが本部会の最大の長所であり、最大の成果だと感じている。今後も一つ一つの実践を大切に、その成果や課題を皆で共有しながら研究を進めていきたい。